

ヒマワリの咲いていた日から

瀬谷区支部 渡邊 玉見（子）

戦没者 渡邊 達也

戦没地 フイリピン

空は青く晴れ渡り大輪のヒマワリの咲いた裏庭で母はたらいで洗濯をしていた。大人の様子が何となくいつもと違っていった。しばらくして戦争は終わったよと聞かされた。私にとって八月十五日の記憶はその程度しかない。でもその日から私達の戦後の生活が始まった。街は空爆を受けることもなく毎日の生活はそれほど変化は感じられなかった。変ったのは防空頭巾をかぶりランドセルを背負ったの登校で警戒警報発令のサイレンが鳴ると急いで帰宅させられた日々がなくなり静かな登校となった。しかし校門の横に建てられていた奉安殿がいつの間にか取り壊され校門にかけられていた「國民學校」という標札も「小学校」に変わっていった。

生活の基盤は衣食住であるが住居は焼けなかったが衣、食はきびしく「ないないづくし」だった。運動靴も新しいものは手に入らず穴あき靴も手縫いで修理され上履きはわら草履だった。洋服も兄から弟へ、上から下へとおさがりでそれもあれば良しという状況だった。市場には新しい衣類も出始めていたが粗悪品が多く高値で庶民の手に入るものではなかった。父が戦死した私達

家族はお金もなかった。父親が運送業だった友達の家では、車を運転する人も重い荷物を運べる人もなく閉店も止むなく友人の母は賃仕事に出た。子供達も力を合わせ野菜作りなど手伝ったが僅かばかりの収入では多勢の子供を養うことは難しかった。

都市近郊では食糧入手のため「買出し」が行われた。直接農家に行き米その他の農産物を購入する。お金の無い時には品物との物々交換が行われた。「父親の遺品である背広もコートもＹシャツ、ネクタイ、眼鏡も帽子も靴も自転車もそして風呂桶までも全て子供達が食べてしまいました。そうして子供が成長したのです」と言ったお母さんの言葉が食糧入手が大変だった事を物語っている。田舎ではそれほどまで食糧のきびしさはなかったが、ある日大きな木綿の風呂敷を持ったおばさんが来て母の着物や帯などがタンスから消えて行った。母によく似合っていた着物を近所のクラスメートのお母さんが着ていたのを母に告げた時「あの着物はもう私には必要のないものだから売ったの。これからは洋服の時代だから私は洋服を作って着る」と私をなぐさめてくれた。

洋服も市場には少なく既製品の洋服はまだ高値だった。おしゃれな洋服を着たい若い人達が布地を片手に母のもとへやってきた。デザイナー兼ドレスメーカー兼スタイリスト兼で夜遅くまで働く母の健康を私はいつも気づかっていた。「僕の亡きあと婚家に残り父の世話と子育てを頼む」と遺言して出征した父の言葉を胸に母は三人で生きのびる事を目標として働いてきた日々だったと思う。母のタンスから消えた着物や帯は母の洋裁学校の月謝になったのかなと今にして思う。母に聞いておけばよかった。

私達遺児（父なき子）をおそった本当の悲しさ、悔しさは就職の頃ではなかったかと思う。片親の場合は就職試験を受けることさえ拒否されたことが多かった。特に金融界、大手企業などに多かったようだ。昭和三十年代から四十年頃までの間に就職の時を迎えた人達がきびしい社会情勢にさらされた。

私も例外ではなかった。こんな仕事がしたいと希望を持って受験した時のことである。一次書類審査、二次一般教養テスト、三次専門技術テストとクリアして最後の四次は面接テストだった。どんな質問が出るかなと五人の面接官の言葉を待った。書類をパラパラとめくりはじめたその中の一人の第一声が「あつ、お父さんがいないんですね」と言う言葉だった。一斉にページがめくられた。私はその言葉に対して父は戦死した旨を告げた。しかし私の言葉は無視された。「お父さんが亡くなられた今あなたが早く結婚して家を継ぎ、おじいさんやお母さんを安心させてあげることが一番いいですね」と言われた。それに同調して他の人達も「そうですね早く結婚して親孝行することですねハハハ・・・」と言う笑い声で面接は終了した。その笑い声を聞きながらこれは不採用だな、それならなぜ一次の書類審査で落としてくれなかったのかと悔しい思いと会社に対する不信の念が強く残った。でもそんな思いに躊躇している時間はなかった。片親でも女であつても採用される仕事は何だろうと懸命に考え辿り着いたのが就職だった。当時は十二月末頃が採用試験だったので何とか願書提出が間に合い翌年三月「採用面接に来なさい」と言う通知が届き父の戦死による社会的差別を乗り越えることができたと思つた。

家族調査や親の職業を聞くこともプライバシーの侵害だと言われる平成の時代には父がいな

いことで不採用になる社会状況など想像もできないことだろう。戦争は理由は何であれ互いの人を殺してありその後に来る生活難と親を失った子供の生きのびる事の大変さを考えると戦争は絶対に避けるべきである。平和で豊かな時代に育った人達に戦後の状況を少しでも知って欲しい。